

119 上皮性卵巣腫瘍の胚上皮細胞における steroidogenesis に関する研究—組織化学的・免疫組織化学的検討—

大阪市大

川村直樹, 中村哲生, 田村一富, 山本久美夫,
山片重房, 須川 侑

〔目的〕上皮性卵巣腫瘍において, 腫瘍発生卵巣の間質細胞に性ステロイド産生能が発現し, それは腫瘍上皮細胞に存在するエストロゲンレセプターと一定の相関性を有することを認めてきた。今回, 腫瘍上皮細胞内に局在する性ステロイドが上皮細胞内で合成されたものか, あるいは間質由来のステロイドがレセプターと結合して存在しているものかの鑑別を行い, その意義を検討した。

〔方法〕性ステロイド合成酵素染色に障害とならない固定手技の検討を行った結果, 固定後ただちに凍結切片を作製し, 3β -HSDの酵素染色とE1, E2, androstenedione および testosterone の免疫組織化学的染色とを同時に行い, 鏡検下に腫瘍上皮細胞と間質細胞を分別し, これらの物質の局在を検索した。さらに, 脂質染色, フェロシアン化銅法に基づく電顕 3β -HSD酵素染色を併用し, 腫瘍上皮細胞におけるステロイド合成の裏付けを行った。

〔成績〕①腫瘍上皮細胞のうち, 特に分化型において, ステロイドの局在・合成を示唆する脂質染色・免疫組織化学的染色及び酵素染色のすべてが陽性所見を示し, さらに 3β -HSDの電顕酵素染色においてミトコンドリアのクリスタ膜上及び滑面小胞体に一致して陽性沈着所見が認められた。

②低分化型においてはステロイド合成能は微弱であった。③上皮細胞においてステロイド合成が認められる場合には, 間質におけるステロイド合成能も高いという相互の関連性が認められた。

〔結論〕上皮性卵巣腫瘍の胚上皮細胞に性ステロイド合成能を認めたことから, この細胞の起源が腫瘍化卵巣の間質細胞と密接な関係を有する可能性が示唆された。

120 Krukenberg 腫瘍はステロイド産生腫瘍か? (RIAと免疫組織化学的手法による検討)

和歌山県立医大

北山俊也, 仲野良介

〔目的〕従来, non-functioning tumor の範疇に入れられていた卵巣腫瘍のホルモン産生能が注目されている。なかでも, 従来から, Krukenberg 腫瘍患者はしばしば, 男性化徴候を呈することが報告されており, この転移性卵巣癌におけるホルモン産生能が注目されている。そこで今回, Krukenberg 腫瘍のステロイド産生能を内分泌学的に検討した。

〔方法〕1) Krukenberg 腫瘍患者5名の末梢静脈血中の estradiol (E₂), progesterone (P₄), testosterone (T)の濃度と卵巣静脈血中のE₂, P₄, T濃度をRIAにて測定し, 末梢静脈血と卵巣静脈血中との濃度勾配を検討した。2) 抗E₂, P₄, T, hCGなどの抗体を用いた免疫組織化学的手法(PAP法)にて卵巣腫瘍組織中のE₂, P₄, T, hCGの局在を検討した。

〔成績〕1) 特記すべき内分泌徴候を示さないKrukenberg腫瘍のうち, ほとんどすべての例で, 末梢静脈血中E₂, P₄, T濃度は高値を示し, 末梢静脈血中と腫瘍静脈血中の間にE₂, P₄, T濃度勾配を認めた。中には10倍以上の濃度勾配を示すものもあった。2) PAP法にてほとんどすべてのKrukenberg腫瘍組織中の間質細胞にE₂, P₄, T, hCGの局在を認めた。

〔結論〕性ステロイドの濃度勾配と免疫組織化学的局在から, 大部分のKrukenberg腫瘍は性ステロイド産生能を有し, ステロイド産生細胞はKrukenberg腫瘍組織中の間質細胞である可能性が示唆された。